

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

| | |
|------------|---|
| Title | 条件の言い方 |
| Author(s) | プラパン ラタナソンバット, |
| Citation | 日本語・日本文化研修プログラム研修レポート集 , 1991 : 1 - 12 |
| Issue Date | 1992-03-01 |
| DOI | |
| Self DOI | |
| URL | https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00039296 |
| Right | |
| Relation | |



条件の言い方

ブラバン ラクナソンバット

| 思考と表現

日本人が何かを感じ何かを考え、さらには何かを希望して、それを他人に伝えたく思うとき、多くは言語表現によって伝達意欲を満たすものである。この場、単純なことがらであれば、ただ1つの単語を表すのみでもことたりる。「火事」「危ない」等々、日常よく耳にする言葉がそれである。このいわゆる一語文による言表は、言語能力の未熟な幼児においてもしばしば見られる現象である。ところで、しだいに複雑な意志表現へと進むにしたがって、一語文から単文へ、単文から複雑な複文へと進んでいく。そして、ついには個々の陳述の連鎖としていくつかの文の積み重ねによって表現していくということにもなるのである。このことは、複雑な思考は複雑な表現を要求するということを意味する。

ところで、日本語に慣れない多くの外国人にとっては、複雑な表現形式はまだ学習段階にあるため、これを自由に駆使することはできない。わたしたち外国人は複雑な思考を行ない、複雑な思想を持ちながら、これを正しく写しだすすべをもたないという不満足な状態に置かれている。また、複雑な思想をも解かしうる頭脳を持ちながら、複雑な内容を盛った日本語が解かしえないというもどかしい立場に立たされている。

この、思考力と言語能力との不均衡を解消するためには、複雑な文型を習得し、接続機能を持つ言葉とその用法に通達する以外に道はないと思うのである。

2 接続法研究の問題点

いま「夏になった。」「とても暑い。」という2つのことがらを言表しようと考えたとする。この場合、単に「夏だ。暑いね。」というだけでも、話し手の思考は一応伝達されうる。しかし、夏であるということと暑いということとに対する話し手の判断は、正確に伝えられたとは言い難い。そこで、この2つの概念に対する話し手の判断を表す方法として、いろいろな言葉が用意される。ある人は「夏になって、暑い。」と言うであろうし、ある人は「夏になったし、暑いし。。。」と表現するであろう。またある場合には、この2つの判断の間に因果関係を感じて、「夏になったので暑い。」とか「夏になったから暑いね。」などというかもしれない。ときには、「夏になった。だから暑い。」と接続詞を使ったりする。このように、同じ事象に対しても、話し手の主体的な判断に応じて種々な表現形式が選択され使用される。そして、それぞれの形式の間には、発話者の微妙な判断の相違や感情の違いがあらわされているのである。このことは、日本語における接続機能について、次の点を明らかにする必要性を挙げたいと思う。

(2)

- 1・日本語においては接続機能を示す形式にどのようなものがあるか。
- 2・そのような諸形式によって示される接続機能は、意味面においてはどのような相違や種類があるのか。また、形式と意味との関係はどのようなになっているか。
- 3・意味面から分類された各形式には、実際にはどのような語が所属し、どのような形で具体的に使用されているのか。
- 4・接続機能にあずかる各語の間には意味上または話し手の感情面で差違があるかどうか。あるとすれば、実際にはどのような違いなのか。
- 5・同じ接続を示す語が用いられていても、すべての場合がみな同じ意味や判断を示していれと言えるかどうか。同じ語であっても、そこに意味の幅があるのではないか。
- 6・接続語の種類によっては、前後の叙述における表現形態や使用語意に適・不敵が生じるのではないだろうか。生じるとすれば、そこに何か法則性や規則性といったものがみられるかどうか。

3条件の言い方と日本語教育

次に、いったい外国人は、接続機能、特に条件の言い方としてどのような点に困難を感じているかを考える。これには次の2点が挙げられる。

1・表現者の側として、このような意味を表す場合、どの形式によったらいいか？いま使った条件形式が、自己のもつ感情を正しい日本語として表しているかどうか？

2・理解者の側として、この条件の言い方はどういう意味を表すのか？日本語には同じ2つの句を結び合うにもいろいろな形式があるのだが、この言い方は他とどういうふう違うのだろうか。

これらの点から、

(1) 日本語においては条件の言い方にきわめて類似した表現形式がいろいろ存在すること。

(2) それらの間には微妙な感情の違いが存すること。

(3) ある場合にはそのいずれを使っても意味面で大きな違いがないが、ある場合にはそのいずれかでなければならない点のあること。

(4) 条件な結果の表現形態によって、そどに使われる条件形式に拘束が加えられる場合のあることなどが知られる。

「病気になる」と「休みます」の2つの文を「たら、ば、と」を入れて結んでみると、その各々の文に多少何らかの違いが感じられるにせよ、それぞれ自然な表現として成立している。しかし「休みます」の部分で「休んだほうがいい」としてみたらどうだろうか。

「病気になると休んだ方がいい」には、じっくりしない感じがある。また「なら」の場合(1)「病気になるなら休みます」と(2)「病気になるなら休んだほうがいい」となり、自然な表現として(2)の方が選びたくなる。どのように「たら・ば・と・なら」のちがいは、文末の表現に関係があるのではないかと思われる。というのは、どの4つの場合、前にくる語とのつながり方の形の違いはあっても、あらゆる動詞、形容詞について句をなしているのであり、そのかぎりでは、どの4つの異なりは明らかにできないからである。

英語の場合には、“IF HE’ LL GET SICK, HE’ LL REST”の————の部分“HE IS BETTER TO REST”とも“HE SHOULD REST”ともなりうる。従属節と主節との符合ハ人称や時制では行なわれても、主節の動詞の形は自由である。また、“IF”の部分“IN CASE OF” “PROVIDED THAT” “SUPPOSING THAT”と変わってもそれが特に主節の動詞の形を支配することにはならない。このように、英語だけではなく、学習者の文法構造が日本語のそれと異なっている場合には、日本語教授の上で特に留意する必要があるだろう。

(1) ガスバーナーで細井鉄線を熱したとき、鉄線は赤く光り、さらに熱すると、しだいに色が変わっていく。

(2) 電熱線に流れる電流の大きさを変えていくと、電熱線から出る光の色が変化していく。

(3) 欧州共同体(EC)に加盟する12カ国の間で、1992年末までに、ヒト・モノ・カネ・サービスが自由に移動できる単一市場をつくろうという構想。「欧州再生」がねらい。完成すれば、人口3億2000万人の世界最大の単一市場が誕生する。

(4) 白血病などの血液病や、化学療法が特別によく効く一部のガンを除いて、まず可能ならば、外科手術が採用される。

(5) 生きていたらここで会おう。

(6) 無限は一朝一夕にひとびとの中に定着したのであるが、しかもこれなしには近世的天体運動の理論もなく、数学的自然学の形成もなく、おそらく微分積分学の形成もありえなかったであろう。

(7) ユークリッド幾何学が正しい限り、ロバチェフスキノ幾何学も正しい。・・・ユークリッド幾何学が矛盾を含まないなら、ロバチェフスキの幾何学も矛盾を含まないというのである。

(8) 詩人でなくてどうして、地獄に生きていることができましょうか。詩人というものは、周囲の生活が地獄的であればある程その輝きを発揮し、「バイオグラフィア・リテラリア」の筆者によると、苦悩の中で歓喜の極点に達するのであります。

条件表現に使われる「たら」「ば」「と」と「なら」

日本人は普通「したら」とか「すれば」とかを「条件」の表現といたり「仮定」の表現といたりしているが、これらをあまり厳密にくべつはしていない。B. Block は「たら」の形を“Conditional”（条件形）、「れば」の形を“Provisional”（与件形）と名付け、両方を合わせて、“Hypothetical”（仮説）の表現と呼んだ。そして、与件というのは、（現在ないし未来に）ある行為が起こる、あるいはある状態が存在するというを与件とすれば」という表現であり、条件というのは、「ある行為が起こる、あるいは起こった、ある状態が存在したということ」を条件として」という表現であり、条件「たら」が与件「れば」と違いの、（i）過去も表すことができること。（ii）現在、未来のことを言うときには、その行為が実際に起こるのかどうか、その状態が存在することになるのかどうかについての疑念が含蓄されているが、与件にはそれがないこと、（iii）時間的な意味を持つ、という点であると述べている。

まず、「条件」「与件」「仮定」「仮想」等々ということの最大公約的な共通点を求めるなら、それは、ある非現実の事態（P）の実現が、他のやはり非現実の事態（Q）をひきおこす引き金になるということ話し手が述べようとする表現だといえるかと思う。「非現実の事態」というのは、時間の経過によって自然に実現することが分かっていること（たとえば「雨が降る」）もあり、またはつきり現実と反すること（たとえば「男である自分が女である」「そのときそこにいなかったが、もしいたとしたら」というような）もある。以下では便宜上ひつくめて「条件」と呼ぶことにし、また、条件を表す筋（「前件」）をP いわゆる「帰結」を表す筋（「後件」すなわち注文）をQで表すことにする。

| | たら | れば | と |
|------|-------|------|------|
| 動詞 | ～したら | ～すれば | ～すると |
| 形容詞 | ～かったら | ～ければ | ～いと |
| 名詞 だ | ～だったら | ～なら | ～だと |

「～と」の機能

「～と」には、平接「～て」とほぼ同じ機能をもつ場合がある。

彼は電気を消すと、すぐ目を閉じた。

「～と」には、このような動作の継続を表す働きがあるが、どれは非常件接続である。「～と」が条件接続として用いられる場合は、

参加者が多いと、バスも2台は必要になる。

春が来ると、花が咲く。

のように、一方の条件が成立すると、他方の結果も自然発生的に成立する函数関係にある因果関係を表すことが多い。「～と」によって、表される条件は、条件句によって示された状態において自動的に当然起こる事実、もしくはおのずと確定してしまう事実が後につづく定接を本来の姿都するのである。この場合、条件と結果とがともに現在形をとる点に注意したい。これを過去形「花が咲いた」とするためには「春が来たら」と条件形式を変えねばならぬし、「花が咲くだろう」とするには「春が来れば」と変えなければならない。

君がそういうと、わたしもそんな気になる。(既定)

この例で結果句を「そんな気になった」と過去表現にするためには「君がそういうったら」と変えねばならぬ。また、

そんななどを言うと、承知しませんよ。

において、結果句を推量表現「承知しないだろう」と他者主体に変える場合にも、「言ったら・・・」「言えば。。。」とするほうが自然である。

よく見ると、そんなに若い人でもなさそうだ。(既定)

これも「よく見たら・・・なかった」「よく見れば・・・ないだろう」と、条件形態を変えることによって、結果を過去表現もしくは推量表現に置きけることのできる例である。「若い人でもなさそうだ」は推定表現ではあっても、現在の時点に立つ現実表現である。「・・・ないだろう」の想像表現とは根本的に相違する。このように「～と」によって示される条件結果の各表現がともに現在の時点においてなされている点に大きな特徴がある。

「この道をしばらく行くと、左側に銀行が見えてくるでしょう。」と「でしょう」があっても、後件「見えてくる」だけに対する推量ではなく、前後件全体に対する「でしょう」の判断で、「この道を行く 銀行が見えてくる」の判断はともに現在の認識の連続である。歴史的現在の形をとるところに特異性が見られる。そのため、条件句に「・・・たろうと／・・・たと」の未来形や過去形はあらわれない。また、後続句に「・・・と・・・たい・・・と・・・しよう・・・と・・・ほうがいい・・・と・・・てください」のような未確定な意志はあらわれにくい。「・・・と・・・だろう」の予想はあらわれるが、これも話し手の恣意を超えた因果関係の成立を「だろう」と判断する「と」の発想である。

「～ば」の機能

「～ば」の中には、条件表現をなさない場合があるので注意しなければならない。この店はメロンもあれば、梨もある。

これは「し」とほぼ同じ働きをし、並列に用いられる。

風が吹けば、波が立つ。

このように、「～ば」は話し手のいう定接を表す場合がきわめて多い。

「～ば」は本来時間的観念をもたず、しかも「～と」に比べて具体性に乏しく、観念的想像による場合が多い。ただ客観的に条件結果の因果関係を示すのみなのである。そこに話し手恣意性の入り込むスペースがほとんどない。だから「春になれば、花が咲く」というような自然現象・天然現象を表現する場合とか、

彼女が来れば、10人になる。

4から3を引けば、1です。

のような論理。理屈の叙述に多く使われる。その他、個人的表現を越えた社会の所産ということわざ・慣用句の類に「～ば」形式がきわめて多い。

始めよければ、終わりよし。 恥を言わねば理がきこえぬ。はかりごと密ならざれば成るを害す。 二人心を同じくすればその利、金を断つ。 日光見なければ結構というな。 どうか儲けすれば、どうか損する。 花多ければ、実すくない。

また、個別的事実をあらわす場合にも、それが特定個人に対する描写の場合、「～ば」を使うと、個人の週間・特性といったものを表すことになる。

彼女は机に向かえば、いねむりを始める。

ポチは主人を目レバ、走ってくる。

これを「～と」に変えると。そのときだけの事実になってしまう。

このように「～と」と「～ば」の違いは、「～ば」は時間性をもたないから、「机に向かえば、いねむりを始めた」とか「主人を見れば、走ってきた」とは使えない。そこには「～たら」形式を使う必要がある。

「道がわかれば一人で帰れる」のような意志を超えた理屈の表現も「一人で帰れるだろう 一人で帰れると思う」となると、話し手の意志や判断が出てくる。このような意志的な表現は「と」形式では使えない。「ここまで来れば、もう一人で帰れます」と現実の場面で表現するとなると、かなり個人的な意志表現の色彩が濃くなる。さらに、「酒がなければ、ビールでもかまわないよ」「そんなにおもしろければ僕も読もう」「お金があれば、留学したい」のように、形容詞や「ある いる」などという状態動詞につく場合、「おのずとそうなる そうせざるを得ない」状況からの意志表現になる。

「希望者が多ければ、バスを2台にして下さい」（依頼）、「忙しければ、行かなくてもいい」（許可）、「安ければ、買いたい」（希望）、「仕事が終われば、帰ってくるでしょう」（予想）、「君が帰れば僕も帰ります」（予定）、「そんなに欲しければ、持って帰って」（許可・命令）などという例が多い。

「～なら」の機能

「～なら」にも条件の言い方からはずれる例がある。

あのことなら、もう形がついていますよ。(話題提示の機能)

赤い花なら、まんじゅしゃげ。(話題限定の機能)

これらは「なら」に先立つ部分が句をなさらない場合に生じる。ただし、
ぼくが鳥なら、飛んでいくんだが。

のように「鳥デアルナラ」と置きかえられるものは、体言についても話題提示
や限定ではない。

「～なら」は断定の助動詞「だ」の假定形・名詞や名詞的資格を持つ句、動詞・形容
詞の言いきり形(終止・連体形)、および体言や用言に動詞・助動詞を介してつく。形容動
詞は假定形の活用語尾が「なら」の形をとる。「～ならば ～なら」両形がみられる。

「～なら」の前身は古代語の助動詞「なり」の未然形である。「なり」は体言や活用
語の連体形につく断定の助動詞と、終止形に続く伝聞・推定の助動詞とがあるが、現代語に
おいてもこの両方の使われ方が生き続けている。すなわち

「お手伝いをしてくれるなら、おこづかいをアップしてもいい」

というとき。相手がお手伝いをすることをこちらから一方的に希望条件として提
示するような場合なら、単なる判定であるが、相手側が自発的に「僕お手伝いをするよ」と
言ったのに対して、直接あるいは間接に耳にして「そう、お手伝いしてくれるのか。してく
れるなら・・・」と言えば、伝聞の「なら」となる。「なら」の意味はいろいろと転ぶ。

(1) 断定の「なら」

A 話して側が一方的に考えだして提示する条件。現実と一致するか否か、
相手がそれに従うかどうかは分からない。希望条件になることが多い。

B 現実の場面からそれとわかる事柄をふまえて提示する話している意志。

(2) 推定の「なら」

現実の場面や事の成り行きから状況を推定し、その仮定的事態に基づいて
意見を提示する。

(3) 伝聞の「なら」

他者の情報などに基づいて、それを前提にして相手側に示し求める表現。

条件表現としての「なら」は以上の3つのいずれかである。

会社をやめるぐらいなら、死んだほうがましだ。

先生のお宅へ伺うなら、これをもって下さい。

のように、事柄が生起し実現する場合を想定または伝聞して、それが実現する

(8)

以前の時点に立って、話して自身の事前にとるべき立場・行為・意志・意見などを示す（仮定）。また、

君がそんなことを言うなら、僕にも言い分がある。

のように、その条件が成立している現在、その状態において話し手のとるべき立場・意見・行為などを示す（既定）。この場合、条件句の主語は2・3人称をとり、相手もしくは第三者の行為の実現を話し手が想定あるいは伝聞して自己の立場・行為・意見を決定する。それゆえ仮定・既定の2つの場合が生じるが、一方、主語に話して自身が来る場合には、

もし僕がやるなら、まずこっちから始めるな。

のように、仮定条件しか現われない。「～なら」によって導かれる結果は、その条件の実現に対してあらかじめとるべき行為・立場を示す。したがって、後続句における判断の主体は話して自身のはずである。

もうじき電車が来るなら、警報がなりだすはずだ。

話し手の判断は、「～はずだ」で表される。「・・・なりだす」と客観的に叙述することはできない。また、「～なら」は条件が実現する以前の時点に立ってなされる判断ゆえ、後続句に過去表現は現われない。

雨が降るなら、傘を持っていきました。

それは絶対に言えない。雨が降ることを事前に伝聞して、それが実現する事前の時点において、とるべき態度・行為・意見を後続句に述べる。

過去——— 結果 条件——— 未来

後続句 先行句

話し手

大学生なら、そのくらいのことはわかっているはずだ。（既定）

咲いた花なら、散るのは覚悟。（既定）

「体言 なら」のときは、「・・・である以上・・・は当然だ・・・にちがいない・・・は覚悟のうえだ」などの意味を表す。

これが全部ダイヤなら、どんなにすばらしいでしょう。（仮定）

実現不可能な事柄を空想する場合には、空想実現後の結果に体する判断を表す。

「～たら」の機能

動詞連用形について、「・・・したら」形容詞カリ活用について「・・・かったら」、形容詞および断定の助動詞について「・・・だったら」の形で、前件の状況が成立したときにおいて後件が問題となることを表す。

「～たら」の条件法は、前件だけではどういう条件なのかははっきりしない。たとえば、「ここまで来たら」と言っても、「来る」という行為・作用が仮想・仮定なのか、未来なのか、現在か、過去なのかは分からない。「～たら」のあとに後件を続けて、「ここまで来たら、死んでいただろう」（仮想）・・・たら、よかったのに（仮定）・・・たら、ごほうびをあげる（未来の予定）・・・来たら、もう1人で大丈夫です。（現在の事実）ここまで来たら、向こうから先生が来た。（過去の事実）」

のように、はじめて条件の意図がはっきりするのである。

「～たら」は、「～なら」と全く反対の形式である。

「～たら」条件は、未了表現と、完了、過去表現とに分けることができる。

先生に会ったら、よろしくお伝いください。（仮定）

機能デパートへ行ったら、先生に会いましてね。（既定）

「～たら」は事柄が起こってしまった場合を想定して、あるいはすでに生じた状態において、主題の人間やものごとが起こった事柄や、その想定に対する話し手の立場意見を叙述する。したがって、「～たら」には後続句に意志・希望・勧誘・命令・許可等の表現を行なうことも許される。この点「～と」のような恣意性をさける条件とは著しく性質を異にする。しかも、

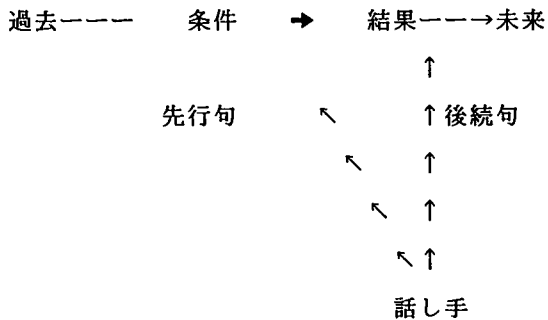
家を出たら、雪がひどく積もっていた。

先生のお宅へ行ったら、先生はお留守でした。

のように、条件によって、引きだされる結果は偶然的要素をもつ。言ってみれば、その事実・事柄がどのような事情や場合のもとで起こったかをまず示し、その事実・事柄がただ後続するという展開形式である。「～たら」によって提示される条件は、おこってしまった場合をふりかえてみる立場・すなわち観念的過去の立場である。この条件が起こってしまったときと場に立って、話し手はそこに生起する事態を眺めるという表現機構をとる。

「～たら」形式が条件に過去表現をとっているのも、かような機構に由来するのである。「～たら」は他の諸形式に比べ、きわめて個別的・具体的・かつ自由・広範囲に使われる一般的

条件ではなく個別的条件を表すのである。



1・未了の「～たら」

(1) 不確かな未来、仮想

形容詞。形容動詞を前件とした場合は、「～ば」に相当する。

「もしさむかったら、窓を閉めて下さい。」

動詞を前件とした場合は「・・・た場合」に相当する。

「万一雨が降ったら、せんたくものを取り込んでおいで下さい」

(2) ほぼ確定した未来

動詞を前件とする。「・・・たそきに・・・てから」に相当する。

「飛行機が止まったら、安全ベルトをはずして下さい。」

(3) 促す言い方

動詞を前件として、「～たら」で文を止めるか、「・・・たらいい たらどう・・・たらいかが」の形をとると、相手にある行為の開始または終止を促す表現となる。仮定的な条件を提示することによって、結果的にその実現を促す観誘表現となるのである。「・・・たらいいのに」の形で、相手のほか第三者（他者）に対する眺望にもなる。「・・・すれば」に置き換えるのも可能である。

2・完了の「～たら」

(1) 既定・・・現在のこと

形容詞・形容動詞を前件とした場合は「～ば ～なら」に相当する。「そんなに暑かったら、エアコンをつければいいのに」

動詞を前件とした場合は「～ば ～たなら ～ので」に相当する。「(途中まで送ってきてもらって) もうここまで来たら、あとは一人で帰れます」

(2) 既定・・・過去のこと

動詞を前件として“・・・したところ・・・したとき”の意味を表す。後件は「・・・したら・・・た」と過去形をとるのが一般。「外へ出たら雨が降っている」のように「・・・したら・・・している」という形も見られるが、やや文学的な表現に見られる。「家へ帰ったら電話をする」のように「・・・したら・・・する」文型をとると未了表現となってしまうのである。

参考書

- 1・ 森田 良行 「文法一条件の言い方」、1971
- 2・ 北条 淳子 「条件の言い方」、1964
- 3・ 国立国語研究所 「日本語の文法（上）（下）」1978、81国立
国語研究所